



Tokyo Gakugei University Repository

東京学芸大学リポジトリ

<http://ir.u-gakugei.ac.jp/>

Title	2000年度巡検報告 江戸城下町の地域構造と鮮魚流通 (fulltext)
Author(s)	荒木,里佳
Citation	学芸地理(56): 42-44
Issue Date	2001-00-00
URL	http://hdl.handle.net/2309/38598
Publisher	東京学芸大学地理学会
Rights	

2000 年度巡検報告

江戸城下町の地域構造と鮮魚流通

2000 年 11 月 26 日 (土) 実施 案内者：古田悦造 (東京学芸大学教授)

コース：東京駅－大手門－旧江戸城－北の丸公園 (昼食)－
日本橋 (魚河岸跡、都市計画)－佃島 (関西漁民の移住集落、漁村)

今回の学会巡検は、11月26日(日)、古田先生にご案内をお願いし、江戸城－日本橋－佃島というコースで行われた。天候に恵まれ、すがすがしい秋晴れの中、参加者はいずれも思い思いに古田先生の説明に興味深く耳を傾けた。

今回のコースは、佃島の漁師によって水揚げされた魚が日本橋の市場に運ばれ、さらに江戸城に運ばれるという魚の流通経路を逆から追ってみるという設定であった。つまり、武家地、町人町、漁師町と辿ることにより、消費から生産の場への空間の結合を捉え、江戸時代の町場の発達を先生にご案内でしていただくものであった。

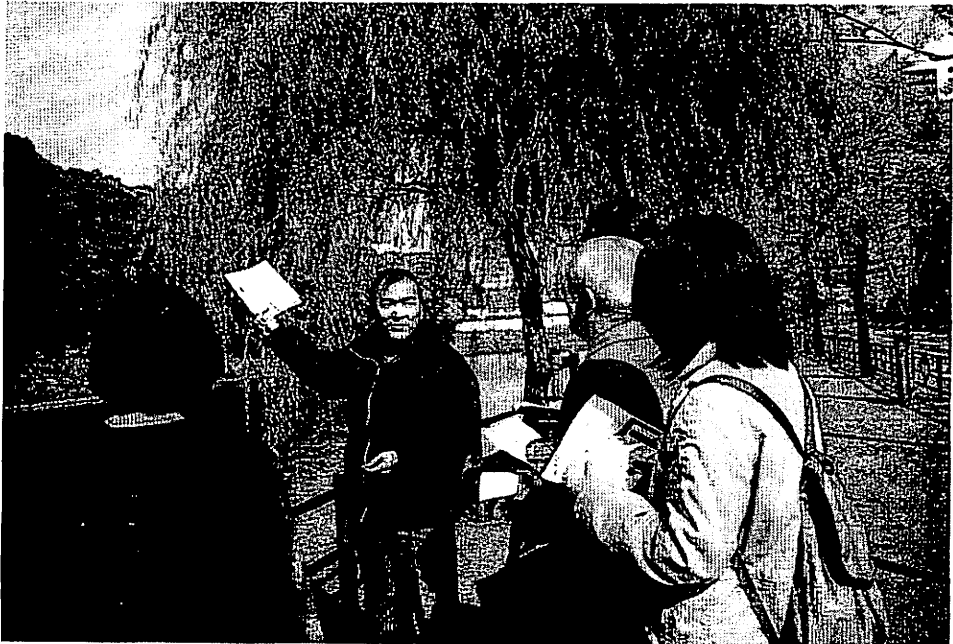
JR 東京駅丸の内北口に集合し、丸の内の概況図をみながら巡検の説明を受けていると、側にきた外国人の2人もじっと見ていた。地図をみているのかと思ったら、道を聞きかかったらしく、説明が終わるのを待っていたようで、古田先生が対応された。聞くと、スウェーデンから来たらしい。すでに、この巡検は、国際色豊かな所に突入してしまったようである。

大手門までは御堀の側を歩いた。御堀の向こうに見える富士見櫓は、天守閣が焼けた跡は天守台の役割も果たしていた。歩いている人を見るとアジア系の人や、欧米人が多く、日本人が少ないようにさえ見えた。飛び交っている言葉も英語、韓国語などであり、国際色豊かである。さて、御堀の角の部分の石積みを見ると、石は長方形で、きれいなカッティングをしている。その角の部分がきれいに並んでいる石積みの方

法を算木積みという。この大きな長方形の石を並べることは隙間をなくすことになり、左右から角に集まる石の圧力を支える効果がある。一方、角でないところの石はバラバラのように積み込まれている。形も大きな長方形ではない。この積み方を野面積みといい、雨が降った後の壁面の水圧を抜き、弱める効果がある。

大手門から皇居東御苑(江戸城跡)に入った。大手門に入ると、さらに門があり、二重の門になっている。よくみると、鉄砲はざまという鉄砲を撃つための穴が壁面に空いている。大手門には、武器や武士の配置が多かった。大手門は重要な門であった。三の丸尚蔵館では、少し時間をとって江戸から明治にかけての宮廷装束を見た。三の丸尚蔵館を出て左に曲がっていくと、見事なほどに大きな石が積み込まれている。これは徳川家が各藩に命じて、主に伊豆半島東海岸から江戸へと運ばせたものである。さらに歩いて右に曲がると、少し急な上りになる。古田先生は、江戸城は平城というよりは平山城であり、地形をうまく利用した城であると説明されていた。

坂を上りきると、本丸跡に着いた。あの有名な松の大廊下跡は、吉良上野介が切り付けられるという事件があった場所である。この事件の背景として、どちらも塩業が盛んだったために競合関係にあったのではないかという説明を受けた。それから、富士見櫓に行き、多聞へと向かった。多聞とは、防御を兼ねて石垣の上に設けられた長屋造りの倉庫であり、鉄砲や弓矢が



収められていた。そして、この先にある将軍の生活の場である大奥に向かった。大奥には将軍の食事を作る台所があり、佃島から献上された魚はここで調理し食されていた。その後、天守閣跡に向かった。天守閣は明暦の大火で焼失したあと、再建されなかった。その理由として、防御面では、防御の要である外堀が完成し、さらに幕藩体制が安定して防御の必要性が薄らいでいたこと、財政面では元禄年間には赤字財政になっていたこと、権力の象徴としてその頃高い櫓は必要なくなっていたのではないかと説明があった。

北詰橋門から出て、北の丸公園に入った。現在名残はあまりないが、木立が多く、憩いの場として賑わっていた。東京の真ん中にあるにもかかわらず、緑が多く紅葉を見る人、撮影する人などたくさんいた。ここで昼食をとった。その後、田安門から出て地下鉄で移動して日本橋に向かった。

江戸時代、日本橋は東海道と奥州道の結節点であり、高札場があった。現在は、日本橋の上を首都高が通るといふ環境である。そのすぐ側に日本橋魚市場発祥の地という碑がある。その碑には、摂津国の佃村の人が来たという記述があった。現在、魚市場は築地に移ってしまったが、江戸時代は日本橋（安針町など）に魚市場があり、海産物はここに集められていた。現在の日本橋をみると、日本銀行を中心とした銀行の集積地となっているものの、日本橋三越、中央三井信託銀行など旧三井財閥の名残があり、魚関係の名残を探すと、八木長、まつ本、山本海苔、かつおぶしの大和屋、にんべんなど、乾物屋が点在していた。さらに、地下鉄で佃島に向かった。

月島の駅を出て佃島に着いた。家と家の隙間が妙に狭い。家と家の間の細い路地を抜けてから説明を受けた。先生の用意して下さったプリントで佃島の集落形態を見つつ、現在の佃島の家々をみると、以前の土地区画と変わることなく家々の連立した集落形態であった。間口4間が道路と接していて、間口4間の間に細い路地

がある。その路地に対して、家の入り口があり、間口4間を一区画とすると、路地の両脇に4軒から6軒の家があった。家と家の隙間は30cm以下であり、内心、火事があったらどうするのだろうか心配になった。佃島は敷地が狭く、当初の敷地から少し拡大したようである。先生の説明によると、プリントの船置き場は、宅地に使われるようになったようだ。佃島は、江戸時代の区画が残る興味深い集落形態であった。

佃島の歴史は江戸時代に始まる。家康から佃島の地を賜ったことにより、摂津国の佃村の漁民が佃島に移転してきた。佃島の住吉神社は摂津国佃村から分化したものである。佃島の住民は土地を賜ったのに加え、広い範囲の漁業権を賜った。佃島の住民は幕府に特権を賜っていたのだから、魚を江戸城に納めるだけでなく、臨海を見回って情報を得てくるという幕府からの命もあったのではないかとあくまでも推測と言いながら、興味深いお話を聞くことができた。その後佃島渡船跡に行った。佃大橋が東京オリンピックに合わせて開通になるまで、渡船があった。参加なさった方のお父様が近くで働いていたらしく、その方は渡船に乗ったこと事があったとおっしゃっていた。佃島といえば佃煮が有名であり、その後そこへ立ち寄った。最後に、河崎先生がこの巡検の参加者を代表してお礼の挨拶を述べた。

今回の巡検では、魚の流通を逆に追っていくことにより、江戸時代の江戸城を中心として日本橋の町人町や佃島の漁師町などが広がる江戸城下の発達を垣間見ることができた。東京都心部は江戸時代の城下町の下地の上に成り立っており、そのことを時間の流れと空間のつながりから感じることもできたように思う。非常に興味深い巡検を企画し案内して下さいました古田先生に感謝したい。

(荒木 里佳 大学院2年)